



日本近代史を動かした  
長州人脈の大集成！

# 近代防長人物誌

全三巻

「現代防長人物史」改題

井関九郎著

マツノ書店

限定五百部復刻(番号付)



全国にも類のない 明治大正期の人物誌

近代防長人物誌

マツノ書店

近代防長人物誌

井関九郎著

# く之部

## 久原房之助君

衣を千仞の崗に振ひ、足を萬里の流に洗ふ、偉丈夫須らく



此の氣慨なかる可らず。毀譽褒貶は社會の通態、眼光豆大徒らに小天地に踟躕して井底の蛙者たるに甘んずるは、眞に男性的の人と謂ふを得ざるなり。今や同胞七千萬を算する我が國に於て、堂々

たる雄圖を抱き、覇を世界に争はんとするもの果して幾人かある。世間筆舌の人多し、而かも不言の間に於て畫策經營、能く國家的事業を完成し、身を挺して奮闘努力し、衆人環視の裡に飛躍發展せんとする者、我久原鑛業株式會社々長久原房之助君の如きは、蓋し罕なりと謂ふべし。宜なるかな、大正四年御即位式舉行に際し叙從五位、同五年十一月多年實業界に功勞あるの廉を以て、特に叙勳三等瑞寶章を授けられ、又中華民國政府は君が日支親善の爲め貢獻するの大なるを以て別に嘉禾二等章を贈れるは、洵に實業界近時稀に見る處にして、先づ君が立志の行程を記傳するに當りて、其の成功を物

語る榮譽の序幕なりと爲さざるべからず。

君は明治二年六月を以て、山口縣阿武郡須佐港に生る、父君亡庄三郎氏は故男爵藤田傳三郎氏の實兄にして、出で、久原家を繼げる人、母君は長州萩の士族田村家の出にして富美子と云ふ。而して君は其の三男たり、長兄には齋藤幾太、田村市郎の兩氏あり、妹君菊子は大阪毎日新聞社長本山彦一氏に嫁し、明治四十四年他界せられき。

明治六年父君庄三郎氏、長兄故藤田鹿太郎、實弟故藤田傳三郎の兩氏と共に藤田組を組織し、官廳の用達、土木鑛業等を經營せられしが、明治十年の役には専ら陸軍の用達に従ひ故久原庄三郎氏軍需の急に應じて貢獻する所尠からず、其の後更に小坂鑛山及び岡山縣兒島灣の開墾、其の他内外諸種の大事業に従事し、明治二十六年には進んで合名組織に改め、斯くて藤田組の事業は大阪實業界の發達に伴うて、漸次其の基礎を確立せんとするに至りしが、會々小坂鑛山の經營難あり、延いて一時非常なる財政の悲境に沈淪することとなりたり。而も遂に同鑛山の異常なる大成功に因り、藤田家は屹然頭角を著し、一躍大阪屈指の富豪に列し、一面、明治維新の政變に伴ふ産業界革命の權威者として、其の今日あるの基礎を確立せり。蓋し此の間所謂草創、建設、擴張の三期間に亘る幾十年の久しき歴史に於て、庄三郎氏等兄弟相擁護し以て、藤田組と生命を共にせる協力同心の力は、與て藤田組を

# 私の川柳趣味

井上 劍花 坊

随分あちこちから談話の御注文も受けます、防長人物史へ



出す材料を話してくれいこの御談は奇抜です、奇抜といふのは可笑しいが實に嬉しい、光榮です、そこでうんと一つ長談を試みたいが私も多忙なり人物史でも御迷惑だらうと思ひますから、一寸申

したいと思ふこと、いさせて戴きます。

我田引水かゝれませんが、餅屋はどこまでも餅屋の御話がようございませう、私は私らしく川柳の御話を致しませう、私の改良してこの明治大正の天地に復古させた、否維新された川柳なる者は實に今より百餘年前の江戸の文明が産んだ日本の特産物です、それが後に狂句といふ者になり。

つまらぬといふはちいさな智恵袋

大黒を和尚布袋にして困り

つばくらのあたまにひやく二階の屁

よくいへばわるくいはれる後家の髪

といふやうなものが川柳だ、と一般の人が思ふやうになりましたが、川柳は只こんなものに止まつたものではありません、理屈を云ふよりも俳句を御目にかけてませう、狂句に墮落しない前の古い川柳を御目にかけてませう。

ほとゝぎす二十六字はあんどじさせ

四五人の親とは見えぬ舞の袖

屁をひつておかしくも無いひとり者

居候屋根から落ちて酒に酔ひ

陽虎ではござりませぬどのたまはく

傾城に可愛がれて運のつき

といふやうなものもあります、また私の句……と揚げるのも妙ですが、自分で改革したといふ人間の句を御目にかけてないのも無責任ですから一ツ二ツ御目を汚します。

八百萬押すなくと御觀戰（日本海々戰）

猫の皮金の無くなる音をさせ（三味線）

死神が離れて二人腹がへり（情死中止）

さあおれも死に、行かうと鎧を着（出陣）

戀をした顔とは見へず土佐衛門（失戀の水死）

これは一班だけです、今は私が改革に着手してから十五年になります、芭蕉や子規の事業に比するのは僭越ですが力めてやまずんば……否天下の同情者が我に一臂の力を添へて下さつたら、百年の後、明治大正の文學史の一頁に何か残すことが出来やうと思ひます、大分日本中へ廣まつて参りました、どうかながかき同郷の同胞諸君も、この世界無比の短文學に興味を持つて戴きたいのです、まことに

▼明治大正期の山口県人の中から、政治、軍事、産業、教育、芸術、宗教、医学など各方面に活躍した人物一三〇〇余名を選び、その系譜、出生、略歴、業績、エピソード、性格、家族等を平易な文章で記述した史的人物伝。関連人名を含めると、その数はゆうに五〇〇〇名を越える。

▼もちろん維新史上の人物も、付随して多くとり上げられており、「明治維新人物誌」としても貴重である。

▼全国的にみて、各県別の人物誌のほとんどは藩政期の人物を扱ったもので、明治時代に刊行されたものが多い。いくつかの県では、最近編集された人名事典もあるが、本書のように、明治大正期だけの、詳細な事典は全国にも例がない。

▼B5判二〇〇〇頁の中に、人物伝のほか顔写真一〇〇〇点、本人の筆跡六二〇点、書画の写真二二〇点、建築物などの写真一三〇点を掲載。そのほか会社の決算書、営業報告書、社史なども含む、多彩な山口県近代史資料である。

▼座右の読み物としても第一級である。本書を繙けば、近代の防長人は官・軍に偏することなく、経済や文化の方面においても広く全国に進出していたことがよくわかる。山口県を知るためにも必読の書といえよう。

▼本書の初版は『現代防長人物史』と題し、天地人の三巻に分けて大正六年、東京の発展社より刊行されたものである。以後七〇年をへた今日、本書を復刻するに際して、時代的な誤解をさけるため、書名の一部を改め、新たに「人名索引」を作成し、別巻として付した。

▼日本近代史の究明に、あるいは山口県出身者のルーツ探索に不可欠の希覯本。極少数部の復刻につき、今すぐご注文を。



井関 九郎氏

**略歴** 明治9年 山口県萩に生まれる。独学で英語、ドイツ語を修得。大正6年『現代防長人物史』全三巻を東京・発展社より刊行。大正10、昭和5年『大日本博士録』全五巻を東京・発展社より順次刊行。昭和7、14年『批判研究博士人物医科続篇』『創刊学位大系博士氏名録』『学位大系博士録』を東京・発展社より刊行。昭和15年 急性肺炎にて死亡。

予約募集中

締切

61年11月30日(厳守)

発売 62年1月中旬予定

- B5判 クロス装束上製函入
- 全三巻セット (分売不可)
- 総頁 二〇〇〇頁 (別冊「人名索引」)
- 写真 約二〇〇〇点

予約特価 三万円(〒500)

定価 三万五千元(〒500)

限定五〇〇部

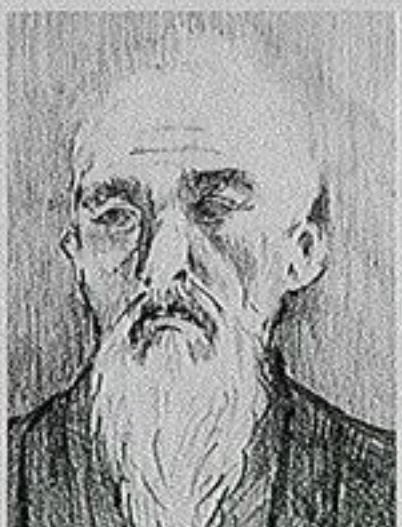
(番号入)

- ▼ 限定五百部復刻につき、売り切れの際はご容赦ください。
- ▼ 書店へは販売しません。必ず小社へ直接お申し込み下さい。
- ▼ 予約者のみ、三―六回の分割払いに応じます。(利息不要)

# 読んで楽しい、全国に類のない明治大正の人物万華鏡

〒745 徳山市銀座2  
00834②195

万人書店



近藤 清石



中原 邦平



松岡 洋右

# 維新後五十年、山口県

## の人脈が日本近代史発

## 展の原動力となつてい

## た時代に活躍した一千

## 三百余名の大人物誌



瀬川 秀雄



江木 衷



江木 衷夫人

## 日本近代史の基本資料

紀田 順一郎

一つの時代、一つの地方の歴史は、人物を通して知るのが最も捷径であるが、そのための適切な資料が直ちに得られるか否かが問題である。さいわい近代の山口県には、研究者のためにたいへんすぐれた文献がある。それが本書『近代防長人物誌』（『現代防長人物史』改題）である。

人名事典のスタンダードである平凡社版『大人名事典』を見てみると、防長関係の人物に関しては参考文献として『現代防長人物史』を掲げていることが多い。それだけでも重要な基本書であることを察するに十分であるが、実際に繙いてみると、維新史上の人物から官界、学界、実業界、教育界、文化界にいたるまで、あらゆる分野を網羅し、しかも記述は精細をきわめた、たいへんな労作ということがわかる。

さすが、維新を主導した長州だけに、豊富な人材を輩出しているが、大正中期の刊行になる本書の特色は、幕末から明治初期にかけて活躍した人々のほとんどが鬼籍に入り、次代に引きつがれている状態を反映していることだろう。たとえば吉田松陰の家は長妹の夫の二男、吉田庫三（横須賀中学校長）に継がれたことが、庫三の項でわかるし、大村益次郎の跡は子の寛人を経て養嗣子（旧山口藩主毛利元徳の男、徳敏）に継承されたことがわかる。また徳敏は西園寺公望の養嗣子八郎の兄にあたるという。

言論史上重視すべき法学者江木衷は、現在二、三の人名事典によって辛うじて事績を知ることができるのみであるが、本書では文章を再録し、筆跡を掲げているばかりか、“才色兼備”の夫人の肖像まで載せるといふ徹底ぶりである。図版が多いのも本書の特色で、鉦山王の豪壮な邸宅図などは当時のこの種事業がいかに巨万の富をもたらしたかを窺うに足る。読んで飽きないのも本書の美点である。

著者の井関九郎は本書のほかにも『大日本博士録』なども編纂し、これらも人名事典の基本資料とされているが、まことに生涯を人物誌集成一筋に打ちこんだ得がたい存在である。今回のマツノ書店による復刻版は、詳細な索引を補ってさらに閲読に利便ならしめるという点でも待望のものだが、これを機会に全国の学校・図書館・研究者などが参考図書として一本を備えるよう、心から推賞したいと思う。